

薔薇の象徴空間

濱本 秀樹

私の日々の暮らしの中で僥倖の一つと言ってもいいことがある。それは比較的大きな植物園の近くに住んでいるということだ。園芸を趣味としていたので、暇さえあれば小さな植物図鑑をポケットにその植物園を歩き回る。植物を観察しその名前を覚えることはポケ防止に有効だし、健康にももちろん良い。近年では花木の姿かたちや名前を記憶するだけではなく、その文化史的背景や文学作品との関りなどにも興味の幅が広がってきた。当然この分野にも参考にすべき先達がいる。例えば石川林四郎氏の『英文学に現はれたる花の研究』（1924、八坂書房）や、加藤憲一氏の『英米文学植物民俗誌』（1976、富山房）、澁澤龍彦氏の『フローラ逍遥』（1996、平凡社）などは座右の書であり、四季折々の散策の中で出くわす花木に関する多くの知識を学ばせていただいた。さて加藤憲一氏も述べておられることだが西洋文化の中で注目値する花卉の三秀として取り上げられるのは、薔薇、ユリ、そしてスミレだろう。その中でも薔薇はその豪華さの故に多くの文学作品に登場する。ここで書き留めておこうとするものは薔薇と文芸作品との関わりについての一園芸愛好家の覚書に過ぎないが、上述の著作も念頭に置きつつ幾分異なった視点からこのテーマに関する話題を紹介してみたいと思う。それは薔薇の持つ象徴性や含意がどのような形で具体的な文芸作品の中に現れてくるのかという点である。しかしこの点についても澁澤龍彦氏は薔薇のシンボリズムについて語ることを強く戒めている。長いが引用してみよう。

薔薇のシンボリズムも、数え上げていたら切りがないであろう。ヘレニズムも中世のキリスト教も、寓意文学も錬金術も、王家の戦争も聖女伝説も、ダンテもボッティチェリも、紋章も庭園も、ステンドグラスも香水も、リルケもリヒャルト・シュトラウスも、直ちに薔薇のイメージとともに思い出される名前だからだ。まさに薔薇こそ世界に冠たるシンボリズムの王者だという気がする。そうであってみれば、私がここで、その一つ二つを解説してみたところで、いわば焼け石に水であろう。薔薇の威光の前には、私ごときは手も足も出ないような感じなのだ。(澁澤龍彦『フローラ逍遙』)

この警告があるにもかかわらず私は焼け石に水の作業を楽しみたいと思う。具体的にどのような文芸作品でどのような象徴性が薔薇に与えられているかをみておくことで、相互の文芸作品の中に人間精神の薔薇のシンボリズムに関する有契性、つまり行き当たりばったりではない象徴性構築の方向性や連続性が認められるのではないかと考えるからである。結論をもうここで言ってしまう。薔薇の象徴性は背反する概念が対になって現れる、いわゆるアントノミー（反義関係）をなすことが多く、正極と負極の振幅の大きい象徴空間が幾つも集まってさらに上位の象徴空間（メタ的象徴）を形成しているように思えるのである。それではその薔薇の象徴空間の中に歩を進めることにしよう。

薔薇の原産地はペルシャ辺りとされている。そこでは紀元前12世紀ごろには薔薇を香料や薬として栽培していた（中尾2009）。白い薔薇はマホメットの汗から、赤い薔薇はマホメットの血から生まれたという言い伝えもある。薔薇は原産地ペルシャから、パレスティナ、ギリシャ、そしてローマに広がったとされる。一説ではアレキサンダー大王が東方遠征時（BC.344～）に持ち帰ったという話もあるがこれは単なる伝説であろう。詩人ホメロスが『イリアス』の中で薔薇の香油について述べているがホメロスは紀元前9世紀ころの人だからである。紀元前6世紀のアナクレオン、あるいは彼に倣ったアナクレオン風の詩にも薔薇を賛美する詩が見いだされる。その中で、「バラ色に頬を染めるアフロディーテ」という表現が出てくる

(アナクレオン風詩 55、中尾 2009)。アフロディーテと薔薇の結びつきはこのあたりに源があるらしい。

ここでギリシャ神話の中から、後の議論にも関わってくる幾つかのトピックを見ておこう。美と愛の女神アフロディーテは海の泡から生まれた。そしてその時に薔薇も生まれたと言われている。有名なボッチチェッリの「ビーナス誕生」を思い出していただきたい（ビーナスはアフロディーテのローマでの呼び名）。絵の左には男神ゼフィロスが描かれており、花の女神フローラを抱きかかえるようにしながら、アフロディーテに春の西風を吹きかけている。女神フローラがまいているのが白い薔薇の元祖ロサ・アルバ、これは今のアルバ・セミプレナに近いものと言われている。このアフロディーテは美しい女性の象徴のような神であるが、恋心を抑えられない女神でもあった（白幡 1992）。鍛冶の神ヘパイストスと結婚し、子供であるキューピッドを得ていたのであるが、軍神マルスと恋に落ち、その逢瀬の最中を我が子キューピッドに目撃されてしまう。アフロディーテは大慌てし、沈黙の神ハーポクラテスに頼み込んでキューピッドが話せないようにしてしまう。そのお礼にアフロディーテはハーポクラテスに赤い薔薇を送る。そこからラテン語では *sub rosa*、英語では *under the rose* という表現が生まれた。これは「内緒にしてね」という意味であり、現代の英和辞典にも記載されている。先ずこのように薔薇には「秘密」、あるいは「隠された真実」という含意が付随することになる。

さらに薔薇のもう一つの含意もギリシャ神話に由来する。春と花の神フローラの愛していた妖精（ニンフ）がなくなり、フローラはそのニンフを一群の薔薇に変えた。フローラは様々な色を薔薇に与えたが悲しみの色である「青」は与えなかった。こうして青い薔薇はこの世に存在しないものになった。そのため青い薔薇の花ことばは「不可能」、「存在しないもの」である。

「バラ色に頬を染めるアフロディーテ」という例に見ることができるように、薔薇はその鮮やかな色彩と香しさという視覚と嗅覚にうったえる相乗的効果のゆえに、「美しい女性」「恋愛」「愛」との連想が特に強い。またこれらの特性は時の移ろいとともによりなる性質のものであるため「若さの

持つ儚い美」、さらに「時の無常」との結びつきも認められる。この薔薇の持つ無常感は詩想として表現されることがある。これらの具体例はすぐ後で見よう。また赤い薔薇の持つ属性としては時には艶やかさを通り越して妖艶さ、あるいは「狂気」さえも想起されることがある。これは William Faulkner の *A Rose for Emily* (『エミリーに薔薇を』) のヒロイン、エミリーに典型的に見ることができる。夕暮れの中で佇む深紅の薔薇を認めた時のドッキリ感がこの登場人物には感じられる。

さて以上がこれからの話の背景である。薔薇は「秘密、不可能（青い薔薇の場合）、女性の麗しさ、恋愛、儚さ、時の移ろい、狂気 etc.」との連想が働くがその実例と、さらに拡張された比喻を西洋の文芸の中に求めていることにする。

まず薔薇をめぐる英国の詩人たちの詩作を見てみたい。まず素直でわかりやすい詩を最初に鑑賞しそれからシェイクスピアの薔薇のソネット（14行詩）を見ることにする。次にあげるのは Edmund Spenser の『妖精の女王』の中の「薔薇の歌」の一部である（18行のうちの最後の4行）。

Gather therefore the rose, whilst yet is prime,
For soon comes age, the will her pride
desflower;

Gather the rose of love, while yet is time,
Whilst loving thou mayst loved be with equal
crime.

(Edmund Spenser, 1552~1559, The Song of
the rose)

だから若い盛りのこの時にその薔薇を摘みなさい。すぐに年齢が誇りを台無しにするのだから。まだ時のあるうちに、恋の薔薇を摘みなさい。愛し愛される時があるうちに、たとえ恥じらいがあるとしても

ここでも薔薇の美しさの儚さが女性の美しさや自尊心の衰えと結び付けられている。ここで crime「罪」は日本語では、shame に近い意味なので「恥じらい」というように解釈した。ところでこの詩とはほぼ同趣旨のものがピエール・ド・ロンサールの「エレーヌへのソネット 43」にも認めることができる（ピエール・ド・ロンサールは人気のピンクの薔薇の品種名になっている）。14行の最後の3行である。

Regrettant mon amour et vostre fier desdain.
Vivez, si m'en croyez, n'attendez a demain;
Cueillez des aujourd'huy les roses de la vie.

私の愛を悔い、あなたは自尊心を悔やむ
だから私を信じて、明日を待たずに今日
人生の薔薇を摘みましょう

これは前段での、古いさらばえた恋人が暖炉の前で編み物をしながらロンサールの詩を手にとり、彼は自分の輝かしい青春を歌ってくれていたのだと気づいても遅い、すべてが手遅れになってしまうという部分に続いている。だからそうならないためにも明日を待つようなことはせず、今二人の愛を確かめようと歌っている。薔薇は移ろいやすく脆い青春の美を象徴しており、人生の薔薇の時期、美しく輝く時はあっという間に過ぎていくという想いは多くの詩に共通する。「美」と共に、後で訪れる「醜」をも含意する。

次に見るのは「薔薇のように美しい」と素直な表現（simile）で自分の恋人を讃えているスコットランドの国民的詩人 Robert Burns の詩である。

My love is like red, red rose
That's newly sprung in June;
My love is like the melody
That's sweetly played in tune.
(Robert Burns 1759-1796, A Red, Red Rose)

ああ恋人は赤い赤いばらのよう
それは6月に咲く
ああ恋人はメロディのよう
それは香しい調べ

恋人を讃える詩人の明るい気持ちの高揚が感じられ、「赤い薔薇のよう、甘いメロディーのよう」と直截な表現が使われている。この恋人の輝くような麗しさが浮かんでくる素直で美しい詩である。

さていよいよ次にシェイクスピアのソネット 54、99 の一部、それに 130 を見ておきたい。

Shakespeare のソネット 54 の一部

The rose looks fair, but fairer we it deem
For that sweet odour, which doth in it live.
The canker blooms have full as deep a dye
But, for their virtue only is their show,
They live unwoo'd, and unrespected fade;
Die to themselves. Sweet roses do not so;
Of their sweet deaths are sweetest odours
made:
And so of you, beauteous and lovely youth,
When that shall vade, my verse distills your
truth.

薔薇は美しい、その美しさはひそやかな
甘い香りのせい。
野ばらも色は深い、でもその美点は外見
だけ。求められず崇拜を受けず、ひっそ
りと死んでいく。甘い香りの薔薇はそう
ではない。甘い香りの死からは香水が作
られる。そのように君よ、きれいで愛ら
しい君よ。
君の美しさが褪せてもこの詩が君の永遠
の真実を残すだろう。

野ばら（canker）はひっそり死んでいくだけだが一方正真の薔薇は死んでも甘い香りの香水が残る。それと同じように君の美しさが褪せてもこの詩が君の真実を蒸留し抽出する（distill）、という。香水との対比で想い人の若さ、美しさが詩に永久に保存されると述べている。香水は薔薇を摘み、その花びらを蒸留して作られる。従って香水を作る過程では薔薇は死んでいなければならない。恋人の美しさを残すのにはこの詩があるが、その過程では相手は当然死んでいなければならない、というような含意があり、何かしら「死の影」を感じてしまう。「美と醜」と共に「生と死」をも含意するのだ。ちなみにここでの恋人は若い男性である。よく知られたことだが、ソネット集の1番から126番の大部分はFair Youth（美しい若者）に関するもので、特に18番から126番はFair Youthへの作者の愛が主題になっている。

次にソネットの99番を観賞しよう。これも当然Fair Youthへの愛が語られている。

ソネット 99 の一部

The roses fearfully on thorns did stand,
One blushing shame, another white despair;
A third, nor red nor white, had stol'n of both
And to his robbery had annex'd thy breath;
But, for his theft, in pride of all his growth
A vengeful canker eat him up to death.

棘のある枝の薔薇たちは怯え、恥ずかしさに顔を赤らめ、あるいは絶望に白くなっている。赤でも白でもない第3の薔薇は、両方の色を盗み、そして貴方の息の香しさも盗みに加えた。その窃盗の報いから、華やかな花の盛りに復讐の虫に喰われて死んでしまった。

薔薇は病気や害虫の被害を受けやすい。日本では梅雨時など知らぬ間にカビが発生し、瞬く間に薔薇の株すべてに感染してしまう。私のよく訪れる薔薇園でも庭師が神経質なほど花たちの面倒をみている。土の跳ね返りを避けるために根元に静かに水をやり、定期的に薬剤を散布し、肥料は多過ぎず少な過ぎずに施すなど。前の詩で出てきた canker は dog rose (野ばら) の意味だが、この詩の canker はカビによる病気、あるいは cankerworm (花につく害虫) の意味だろう。一応、害虫としてみた。

この詩の面白いところは Fair Youth が「薔薇のように美しい」とありふれた修辞を用いるのではなく、もともと Fair Youth の息の香りを薔薇が盗んだといい、香りたつのはこの若者の方なのだとしている点である。その盗みのゆえに害虫（あるいはカビ）にやられて枯れてしまったと薔薇は散々な描かれ方をされている。シェイクスピアは単純な simile などの修辞を意識的に避けているようだ。これは次の 130 番にも顕著に表れている。これは先ほどの Fair Youth への愛の詩ではなく、Dark Lady (黒い貴婦人) に向けられた詩である。

ソネット 130

My mistress' eyes are nothing like the sun;
Coral is far more red than her lips' red;
If snow be white, why then her breasts are dun;
If hairs be wires, black wires grow on her head.

私の恋人は太陽のように全くない
サンゴの方が彼女の唇よりもっと赤い
雪は白いが彼女の胸元は黒ずんでいる
髪が針金なら彼女の髪は黒い針金だ

I have seen roses damask'd, red and white,
But no such roses see in her cheeks;
And in some perfumes is there more delight
Than in the breath that from my mistress
reeks.

赤と白の模様のある薔薇を見たが
彼女の頬にはそんな薔薇などない
香水はよい香りがするが、それは私の恋
人の息よりもっと楽しめる

I love to hear her speak, yet well I know
That music hath a far more pleasing sound;

彼女が話すのを聞くのが好きだがそれで
も音楽の方がもっと心地よい

I grant I never saw a goddess go;
My mistress, when she walks, treads on the
ground;

女神が歩くのは見たことがないが私の恋
人は地面を歩いてくれる。

And yet, by heaven, I think my love as rare
As any she belied with false compare.

だから言うが私の恋人は嘘の修辞で飾ら
れた女より実に素敵なのだ

このソネットでも「薔薇のように美しい」というような修辞は全く現れず、恋人のネガティブな描写で満ちている。「恋人の頬には薔薇の色合いなど全くない」というように、ある意味ひねくれたような表現は、ペトラルカ風の抒情詩から距離を置こうとする詩人の挑戦なのか、あるいは「黒い貴婦人」は本当に「薔薇のように美しい」とは言えない容貌だったのか。しかし、「嘘の修辞で飾られたどんな女より素晴らしい (rare)」と称賛している。「美しい」を示す fair ではなく「めずらしい」を表す rare なのが面白い。Spencer や Burns の詩と比較してほしい。シェイクスピアは自分の気持ちに正直で、かつ皮肉屋なのか（あるいはシェイクスピア複数説、別人説がいうように、このソネットの作者はストラットフォードのシェイクスピアではないのか）とってしまう。

さて薔薇が登場するシェイクスピアの14行詩（ソネット）の幾つかを見た。次に同じくシェイクスピアの薔薇に関する作品の中で、よく引き合いに出される『ロミオとジュリエット』の有名な場面を見ておこう。そこには彼の別の一面が見える気がする。ここはジュリエットの独白をロミオが立ち聞きする場面である。芝史郎先生の名訳を使わせていただくことにする。

第2幕 第2場のうち33行～49行

Juliet

O Romeo, Romeo wherefore art thou Romeo? 33
Deny thy father and refuse thy name.
Or if thou wilt not, be but sworn my love,
And I'll no longer be a Capulet.

ジュリエット

ああ、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの？
お父様を捨て、お名前をお捨てになつて！
それが駄目なら、ただ私の恋人と誓って頂戴！
そうすれば、私も今からキャピュレットの名を捨てます。

Romeo

Shall I hear more, or shall I speak at this?

ロミオ

37 もっと聞いてみようか、それとも今答えようか

Juliet

Tis but thy name that is my enemy:
Thou art thyself, though not a Montague.

ジュリエット

38 私の敵は、ただあなたの名前だけ。
モンタギューの名をお捨てになっても、あなたはあなたよ。

What's Montague? It is nor hand nor foot.
Nor arm nor face nor any other part
Belonging to a man. O be some other name.

40 モンタギューって何？手でも足でもない、腕でも顔でもなくて、人間の体のどの部分でもないわ。ねー、他の名前になつて。

What's in a name? That which we call a rose, 43
By any other word would smell as sweet; 44
So Romeo would, were he not Romeo call'd, 45
Retain that clear perfection which he owes 46

名前に何があるというの？バラと呼ばれる花は、他の名でも甘い香りに違いはないはずよ。だからロミオには、そう呼ばれなくても、あの身に備わった尊い完璧さは失わずに残るでしょう。

Without that title, Romeo, doff thy name,
And for thy name, which is no part of thee,
Take all myself.

たとえ名称がなくとも。ロミオ、名を捨てて頂戴！
49 あなたの持ち物でもない名前の代わりに私を受け取って頂戴！

薔薇の香しい香りの中で、かなわぬ恋の苦しみを歌っている場面である。ジュリエットは14歳、輝く薔薇のように美しかったことだろう。死を乗り越えようとする崇高な愛情を描いている点で愛の精神性がよく出ている。しかしこの場面で中心になって語られるのは愛だけではない。下線を施した43行から46行において名前と実体との関係がRomeo Montagueという固有名詞とその実体としてのロミオの個性との対比として語られている。

名前自体にはその名前が示す対象の実体と関わる意味などないという。ジュリエットは、薔薇の香りや色、形などは薔薇という名前とは一切関係ないのであるから、「ロミオ、あなたも家の名前を捨てて下さい」と訴えかけている。

これは中世で盛んに行われた「普遍論争」の名残を感じさせる部分である。個々の眼に見える薔薇が存在すること、つまり実在は誰もが納得する。しかし、個々の存在をそうあらしめている普遍存在、つまり薔薇でいえば個々のモノを薔薇となす普遍的性質は実在するのだろうか、というのが普遍論争の内容である。普遍性は実在とする立場が実在論、個々のモノしか存在せず、薔薇とは単に名前であって薔薇をそうあらしめている普遍存在などはないとするのが唯名論である。普遍論争とは実在論と唯名論との論争なのだ。さて、なぜ薔薇が普遍論争にあらわれるのだろうか。薔薇はあまりにも美しく、芳香を放ちその属性は際立っているがゆえに、「薔薇」は単なる名前などではなくて、その際立つ属性の総体（薔薇性）を持つ実在があるに違いないと考えてしまうような対象だから、と考えられる。さらに薔薇の「香油」は薔薇そのものが見えなくなってもその存在（薔薇性）を強く示している。現在でも意味論の入門書の幾つかで、名詞の意味を説明する時、薔薇が出てくる。薔薇という名前と対象の指示関係がその指示的意味、その語で想起される属性の束は薔薇の内包的意味であるというような例である（例えば Kageyama et al. (2003), *First Steps in English Linguistics* : 33)。

もちろんこの場面でのジュリエットは唯名論者で、ロミオにも名前の価値などないのだから捨てるように訴えかけている。ここでの注目点は、薔薇は単なる比喩を超えて、モノと名前との関係で、モノの代表、また名前の代表の役割を果たしていることである。繰り返すがこれはその属性が他の様々な物に比べて極めて明確な際立ちを持つためであり、薔薇でしか「モノと名前の代表」の役割は果たせないのである。こういう点で「薔薇」という名辞は比喩より一段高い位置にあるメタ比喩的な存在と考えてよいと思う。

さて以上で詩作からは離れ、薔薇の名前の唯名性、実在性をめぐっての

議論を続けよう。直ちに想起できる文芸作品として、そのものずばりの名前を持つ Umberto Eco の『薔薇の名前』がある。これは 14 世紀の北イタリアの僧院を舞台にして起こる殺人事件の謎を追う二人の主人公、博識なフランチェスコ会修道士ウィリアムとベネディクト会の見習い修道士アドソの物語である。

『名探偵シャーロックホームズ』との類似性でいえば、ウィリアムがシャーロックホームズに相当し、アドソがワトソンに当たる。彼がこの物語の語り手である点でもワトソン役を務めている（アドソはワトソンとも発音の点でも似ている）。その二人が謎ときに挑む極めて興味深い「推理小説」であり、話の進展の各所に記号論、ストア哲学、神学、中世史に関する記述が散りばめられているため、同時に極めて難解な小説でもある。推理小説としての性格を持つので話の紹介は差し控えた方がよいのだが読書の楽しみの邪魔にはならない程度に輪郭は伝えても許されるだろう。物語は 1327 年 11 月の 7 日間、場所は秘匿されているが北イタリアのベネディクト派の僧院。この僧院には蔵書の質と量を誇る文書館があった。その文書館で写本に挿絵を施す仕事をしていた修道士が、塔の崖下で死体で発見された。この事件の犯人を捜すことが僧院長から依頼された仕事である。修道士たちは非協力的で捜査は進まず、そのうちに第二第三の殺人事件が起こる。ウィリアムの謎解きで真犯人に迫るがその時、大きな悲劇が僧院を襲う。以上であらすじは止めておこう。私が最も興味があるのは謎解きよりも、本書の『薔薇の名前』とは何を示すのか、ということである。先ずウィリアム自身が唯名論者であることが本文中で何度か言及される。また彼の親友がオッカムのウィリアムとされていることもこのことを示唆している。名前について、アドソが生涯で一度恋をした相手の女性がローザであるから、という説もあるがこれはおかしい。答えは読者によって異なるだろうけれども私の解釈では最後のページの一行が全てを物語っていると思う。

過ぎにし薔薇はただ名前のみ、虚しきその名が今に残れり。

これは先ほどの Juliet のセリフと一脈通じるのではないだろうか。ここでの「薔薇」はもちろん植物の薔薇を示すのではなくモノの代表、そして名前の代表である。つまりメタ比喩としての薔薇である。私の解釈は「かつては名前とその示す実質とは密接な関係にあったが、やがて言葉が軽んじられ、実質と切り離された言葉のみが残った」というものである。修道院での事件という話の内容からすると、見かけは厳密に守られている宗教上の教義や習慣が、その本質が忘れ去られ、形のみが残り、言葉が本来の内容を人々の脳裏に想起させる力を失った、その結果によって起きた事件だ、ということになるのではないだろうか。精神世界での覚醒には厳しい戒律と緊張が必要であり「笑い」はその障害になるのか、あるいは必要なのは「笑い」の方なのか。「笑」と「謹厳」の対立。どんな事件が起こりその犯人は誰だったかは本作を読んでみて下さい。

このように薔薇は「モノの代表、名前の代表」という捉え方、メタ比喩的な扱いさえされている。ここではもう少し「薔薇」の象徴しているものを見ておきたい。そのためダンテの神曲、天国篇 31 歌の抜粋を見ることにする。この歌が示すダンテが行き着いたところは至高の第十天、カンディダ・ローザである。ここでは最初の 6 行と 97 行から 102 行までを抜粋する。

CANTO XXXI

In forma dunque di candida rosa
mi si mostrava la milizia santa
che nel suo sangue Cristo fece sposa;

3 祝福を受けた聖なる軍隊が白い薔薇の形をして私の面前に現れた。キリストが自分の血で作り上げた者たちだ。

ma l'altra, che volando vede e canta
la gloria di colui che la 'nnamora
e la bontà che la fece cotanta,

6 もう一方には天使の群れがいて飛び回りながら眺め、自分達に愛を注いでくれる神の栄光とこれほど良くしてくれた有難さを歌っていた。

vola con li occhi per questo giardino;
ché veder lui t'acconcerà lo sguardo
più al montar per lo raggio divino.

99 この花園中に目を巡らせなさい。そうすれば視界もはっきりとし、神聖な光を眺められる。

E la regina del cielo, ond'io ardo
tutto d'amor, ne farà ogni grazia,
però ch'î sono il suo fedel Bernardo».

102 そして天の女王に全ての愛と感謝の気持ちで燃え上がるその私は忠実なベルナルドである。

第十天、カンディダ・ローザとは聖母マリアを中心に祝福された人たちが白い薔薇の形に環状に並んでいる至高天のことである。ダンテはここで聖ベルナルの導きでその強い光を発する環状世界の中心にいるマリアを拝み見ることができる。さらに聖ベルナルの祈りによりダンテは崇高な輝きの中に神の姿を見る。至高天の白い薔薇は聖人たちの衣服が純白であるのでそう見えるのだが、もちろん聖母マリアの慈しみと純粋性の象徴であり、同時に究極の幸いである神の愛の象徴でもある。

下の写真はポーランド、クラクフにあるヴァヴェル大聖堂内のマリア礼拝堂のドームであるが、そこにも至高天を示す白い薔薇が描かれている。太陽が南中する時、ステンドグラス越しの光が白い薔薇を輝かせマリア像の上に降り注ぐように設計されている。



ポーランド、クラクフ市、
ヴァヴェル大聖堂マリア礼拝堂
著者撮影 2019 年 10 月

薔薇は詩に現れる「はかない時の移ろい」、あるいは「やがて死に至る美」というイメージから、「永遠の幸い」へというように時間軸上で負から正の極へと飛躍することもできることがわかる。薔薇は「時間」「変化」「移動」、あるいは「太陽運行」というような概念とも関連する。時間といえば聖母を礼賛する際に祈りの回数をカウントするのがロザリオ（rosario）でありこれも薔薇である。「移動」「変化」との関連では、羅針盤は「方位の薔薇」ともいわれられていて、薔薇は人々を正しい方向に導く物の象徴だった。また北極と南極を結ぶ線は無数にひけるが標準子午線は英国のグリニツ

ジ天文台を通っていてそれを経度0としている。しかし以前はあちこちに子午線が設定されていた。南北の線、太陽運行でいえば日時計もそうである。下の写真を見られたい。



ポーランド、ワルシャワ市、
ワジェンキ公園
著者撮影 2019年10月

この写真はワルシャワのワジェンキ公園にある水平式日時計である。真北を向いて設置されていて、盤面からの角度がその土地の緯度になっている。盤面にRが刻まれている。日時計の盤面に薔薇、あるいはそれを示すRが描かれることがあることがわかる。

以上のようなことを背景にしてダン・ブラウンは小説 *The Da Vinci Code* (Dan Brown, 2003) の中でパリ市内の子午線と聖シュルピス教会に設置された日時計であるグノモン（指時計）とを結びつけ、それをローズラインと呼んでいる。実際はこの小説以前には、パリ子午線も聖シュルピス教会を走る子午線もそのような名称では呼ばれたことはないようだ。しかしいかにも何か大きな秘密を暗示するような名称ではある。*The Da Vinci Code* は全世界で7000万部、日本でも1000万部の大ヒットとなった推理小説である。改めて紹介する必要もないと思われるが、読者は、登場人物の宗教象徴学教授のロバート・ラングドン、暗号解読者のソフィー・ヌヴェーと共にダヴィンチの作品群、人体図、モナ・リザ、聖母マリア、最後の晩餐の中に隠された秘密の暗号をたどっていきながら、キリスト教の異説や聖杯伝説（*The Holy Grail*）の解釈を展開する内容にわくわくさせら

れる。この小説で薔薇は子午線、聖母マリア信仰、隠された秘密、永遠などの象徴として重要な役割を持つ。またフィクションでありながら、冒頭、「この小説で語られることは事実である」との但し書きがあり、物議を醸した。それではこの小説の後半に出てくるロスリン礼拝堂の場面で、ラングドンがソフィーに ROSLIN という語を説明するところ、そしてそれにまつわる詩を読んでみよう (Dan Brown, 2003: 467, 482)。

ROSLIN

This ancient spelling, Langdon explained to Sophie, derived from the Rose Line meridian on which the chapel sat; or as Grail academics preferred to believe, from the Line of Rose" — the ancestral lineage of Mary Magdalene.

ROSLIN: (ラングドンがソフィーに説明する)「この古い綴り方はこの教会がその上に建つ子午線、または聖杯研究者が好む見方では、マグダレンの血の系譜であるローズラインから来ている」

The Holy Grail 'neath ancient Roslin waits.
The blade and chalice guarding o'er Her gates.
Adorned in masters' loving art, She lies.
She rests at last beneath the starry skies

聖杯は古のロスリンの下で待ち剣と杯がその門を守る。匠たちの芸術に囲まれ、それは横たわる。それは輝く星のもとに永眠する。

「ロスリンの下に」というところ、既にお気づきだろうがこれは先に見た *under the rose* (内緒にしてね) の含意に関連する。何か秘密が隠されている、という意味合いである。このように、この小説は薔薇の持つ様々な象徴性を話の展開の中に巧みに取り入れていることが分かる。結局、聖杯はそのローズラインの下にあったのか、なかったのかはご自分で本書をお読みになって頂きたい。

次に取り上げるのは「青い薔薇」とのつながりでテネシー・ウィリアムズの『ガラス動物園』(Tennessee Williams (1944). *The Glass Menagerie*) である。ガラスでできた動物を集めるのが唯一の慰めである女性ローラ、彼女は「青い薔薇」と呼ばれていた。その弟トム、それに父親が出奔したため一家の中心である母親のアマンダを登場人物にした米文学の傑作。この作品は劇のための戯曲である。劇ではまず、トムが舞台の前面に立ち、観客に語り始める。ストーリーはトムの追憶として語られる。

1930年代のセントルイス。ウィングフィールド一家が住むアパートの一室が舞台である。トムとアマンダは理想と現実の間でしばしば対立する。トムは現在の単調な仕事と、何事にも口やかましく指図するアマンダに対して嫌気がさしており、何とかして現在の環境から抜け出そうと思っている。トムの姉ローラは内気な性格で、この娘の行く末を案じた母親のアマンダは、ローラに男性との出会いの機会を与えるために、トムに会社の同僚を夕食に招くよう頼む。数日後、自宅にトムの同僚ジムが来訪する。ジムは、ハイスクール時代にローラが淡い恋情を抱いていた相手だった。それではトムがウィングフィールド家に訪ねてきた場面を読んでみよう。なぜ「青い薔薇」なのかを。

JIM: Aw, yes, I've placed you now I used to call you blue Roses. How was it that I got started calling you that?

LAURA: I was out of school a little while with pleurosis. When I came back you asked me what was the matter. I said I had pleurosis- you thought I said Blue Roses. That's what you always called me after that.

JIM: I hope you didn't mind.

LAURA: Oh, no- I liked it. You see. I wasn't acquainted with many-people...

～～中略～～

JIM: Has anyone ever told you were pretty?

I wish that you were my sister. I'd teach you to have some confidence in yourself. The different people are not like other people, but being different is nothing to be ashamed of. Because other people are not such wonderful people. ～～～ They're common as-weeds, -but-you-well, you're- Blue Roses!

LAURA: But blue is wrong got- roses....

JIM: It's right for you! ? You're pretty! (Tennessee Williams 1944:85)

JIM: 思い出したよ。僕は君のことを「青い薔薇」って呼んでいたね。どうしてだったんだろう？

LAURA: 私、しばらく学校を休んだの、「肋膜炎」(pluerosis)で。貴方がなぜ休んだのかと聞くので、そのことを伝えたら、貴方は「青い薔薇」と聞き違えたのよ。

JIM: 厭じゃなかったかい？

LAURA: 好きだったくらいだわ。私あまりお付き合いがなかったから。

JIM: 誰か君のことをきれいだねと言った人はいるかい？ 君が僕の妹だったらな。どうすれば自信を持てるか教えてあげられるのだけれど。違う人というのは他人とは違うということなんだ。そして違うということは恥じることではないんだよ。多くの

他人は素晴らしい人ではないし、彼らは雑草のようなもんだ、でも君は「青い薔薇」
なんだから！

LAURA: でも「青」は薔薇にはふさわしくないのではないの？

JIM: それは君にはピッタリなんだよ。君はとてもきれいだ！

ローラが「青い薔薇（ブルーロゼズ）」と呼ばれたのは「肋膜炎（ブルローセス）」の聞き間違いによるものだった。順調にいくかと思えたジムとローラ、しかしジムには婚約者がいてすぐにも結婚することになっていることが分かる。失意のローラ、そしてそんな家庭にいたたまれなくなったトムも父親と同じように出奔してしまう。苦い後悔、痛み。

「青い薔薇」の花言葉は「存在しないもの」「不可能」。なぜなら「青い薔薇」は存在していないから。しかし近年、日本の研究者により青い薔薇が開発され、花言葉も「夢はかなう」になったそう。従って、薔薇のアントニミーに鑑みて、今ならハッピーエンドの解釈も可能だろう。ローラは、このつらい失恋から立ち直りジムに言われたことにより、「人とは違う」ことのコンプレックスを乗り越え、やがて自分の存在を肯定し、「存在しないもの」から「夢がかなう」幸せな人生を送ってくれたのではと思いたい。

薔薇はこのように正負の価値を内包しており、正の在り様にも負の価値が暗示され、また負の在り様であっても正の価値が暗示されているように感じられる。それではこの点に関連して、最後に『庭の千草』のことを考えてみたい。これはアイルランド民謡をもとにして日本で唱歌として歌われてきたものである。里見義作詞で明治 17 年（1884 年）に小学唱歌集に『菊』という名前で掲載されている。「ああ白菊、ひとり遅れて咲きにけり、露にたわむや菊の花、霜におごるや菊の花、ああ、あわれ白菊」と白菊の唄になっている。しかし英語の原曲は *The Last Rose of Summer*（作詞 Thomas Moore, 作曲 Sir John Stevenson）であり、「夏の最後の薔薇」を謳ったものなのである。日本語の『菊』の歌詞と英語の歌詞を比べてみよう。

庭の千草も　むしのねもかれてさびしく　なりにけり
あゝしらぎく　嗚呼白菊　ひとりおくれて　さきにけり

露もたわむや 菊の花 しもにおごるや きくの花
あゝあはれあはれ あゝ白菊 人のみさおも かくてこそ
〈里見義, 1884『菊』〉

Tis the last rose of summer
Left blooming alone;
All her lovely companions
Are faded and gone;
No flower of her kindred,
No rosebud is nigh,
To reflect back her blushes,
Or give sigh for sigh!

I'll not leave thee, thou lone one,
To pine on the stem;
Since the lovely are sleeping,
Go sleep thou with them.
Thus kindly I scatter
Thy leaves o'er the bed
Where thy mates of the garden
Lie scentless and dead
(作詞 Thomas Moore, 作曲 Sir John Stevenson)

夏の名残の薔薇、
一輪だけ残されて咲いている
親しい仲間たちは
みな色あせて世を去り
同じ仲間の花もなく
つばみさえもそばにはいない
恥じらいを見つめるものも、
嘆きを分かち合うものさえも
さみしい花、私はお前を放っては置かない、
この茎の上で嘆き悲しむことはさせない
親しきものたちは眠っているのだから
お前も一緒に眠りにつくがよい
花壇に優しく散らしてあげよう
私はお前の花びらを
庭に咲いていたお前の友たちが
香りなく横たわるその床に

日本語の歌詞も、英語の歌詞の意味をかなり意識して作っていることが分かる。どちらも、伴侶、仲間、友達に去られた孤独な心境をうたっている。日本語の方はしっとりとした情緒が感じられ、さみしいけれど、霜に耐える白菊のように毅然として人生を全うしようということをうたっている。一方、英語の方は、実は3番まであり、「最後の薔薇よ、私もすぐに後を追いかけて。この冷涼とした世の中にもうこれ以上居たくはないのだから」というような内容でちょっと陰気くさいし、厭世観一杯の詩である。それに最後に残った薔薇の花びらをむしり取って花壇にまき散らし、仲間のところに行かせてやろう、というところも乱暴で好きになれない。やはり日本的情緒のある「庭の千草」の方が私の好みに合う。しかし「夏の最後の薔薇」には薔薇特有の反義関係（アントニミー）の象徴空間、つまり「生

死」、「美醜」、「永遠と儚さ」、「常態と変化」などがしっかり絡みついでいて、今は花壇に一つ残されてみすばらしい姿をさらしているこの薔薇も、夏の盛りには燃え上がるように生を謳歌し、その華麗さは永遠に続くものと思っていたのに、という目の前には存在しない美を感覚の底に蘇らせ、さらに現実の姿からは（あれほどの栄華を誇ったのだから）今はもう死ぬ方が良いと誘いかけているのだ。薔薇はこのように其の在り様がネガティブであれば対のポジティブの価値を、またポジティブの在り様であれば対のネガティブな姿を意識させる、そのような価値の反転効果を持った稀有の存在とを感じる。

この拙稿の冒頭で引用した澁澤龍彦氏の『フローラ逍遥』の一節、「まさに薔薇こそ世界に冠たるシンボリズムの王者だという気がする。そうであってみれば、私がここで、その一つ二つを解説してみたところで、いわば焼け石に水であろう。薔薇の威光の前には、私ごときは手も足も出ないような感じなのだ。まさに薔薇こそ世界に冠たるシンボリズムの王者だという気がする」というところを思い出せば、確かに薔薇の象徴性についての私の話も焼け石に水だったな、という述懐を持たざるを得ない。しかし、私なりに理解したことは、薔薇を見るときに「薔薇は今の姿だけが薔薇の本来の在り様ではない」という薔薇の時間を超越した象徴性を感覚に捉えなければ、薔薇を観賞したことにならないということと、「薔薇をそうあらしめている普遍存在、つまり薔薇という名前の本当の対象物の存在をどこかで知覚しなければ薔薇の意味を理解したことにならない」という二つのことだ。どうやら私は実在論者のようだ。また植物園に行く楽しみが一つ増えた気がする。

参考文献

- Alighieri, Dante (1321). *Divina Commedia*. 平川祐弘 (2010). 『神曲』河出書房。
Burns, Robert (1991). *Poems and Songs*. Dover Thrift Editions, Dover Publications.
Brown, Dan (2003). *The Da Vinci Code*. New York: Doubleday.
Eco, Umberto (1980). *Il Nome della Rosa*. ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』上下、1990年 河島英昭訳 東京創元社
Faulkner, William (1931). "A rose for Emily," *These Thirteen* に収録。高橋正雄訳 1988. 『エミリーに薔薇を』、福武文庫（海外文学シリーズ）

- 石川林四郎 (1924)『英米文学に現れたる花の研究』、八坂書房。
- 中尾真理 (2009)「薔薇の文化史 (その一) 一花の中の花」『奈良大学紀要』第 38 号 281-302。
- 加藤憲市 (1976)『英米文学 植物民俗誌』、富山房。
- Ronsard, Pierre de (1552). *Les Amours*. 井上究一郎 (1974).『ロンサル詩集』(岩波文庫)。
- 芝 史郎 (2012).『『ロミオとジュリエット』を読み解く一人の世は夢 vs. 愛の力』英宝社。
- 澁澤龍彦 (1996).『フローラ逍遙』(平凡社ライブラリー)。
- Spenser, Edmund (1609). *The Faerie Queene*. 和田勇一 (1994).『妖精の女王』(ちくま文庫)。
- Shakespeare, William. (1595). *Romeo and Juliet*. 小田島雄志訳 ロミオとジュリエット 1983 年 白水社
- Shakespeare, William (1609). *The Sonnets*. 高松雄一訳『ソネット集』岩波文庫。
- 白幡節子 (1992).『花とギリシャ神話』、八坂書房。
- Williams, Tennessee (1944). *The Glass Menagerie*. 小田島雄志 (1988).『ガラスの動物園』(新潮文庫)。